

おおいた 法の海

第 47 号

発行所

浄土真宗本願寺派

大分教区基幹運動推進委員会

〒874-0920 別府市北浜3丁目6-36

本願寺別府別院内

TEL 0977-22-0146

FAX 0977-24-7831



全国仏教青年大会

2007.7.28~29 本山にて

変わらないもの

大分前のことになりましたが、天草にいる兄のところへ行った時の事です。そこで釣りをする機会がありその時に、「海の上は風などで波の向きが変わるけれど、海の中では変わらない一定の流れがある」という話を聞きました。

最近は何に健康を重視した食品や薬のCMをテレビで見ることが多くなりました。体を健康に保つ事は悪いことではありません。ですが、「いつまでも元気で、いつまでも健康で」ということにとられていては、海の上で波の向きを変えているだけのようなもので、海の中にある一定の流れ、私たちの「生死の問題」の解決には繋がっていかないのです。

逃れられない生老病死の中で苦しみ悩んでいる私を目当てとして、阿弥陀さまは、必ず救うという願いをおこされて、その成就した願いを「南無阿弥陀仏」としてとどけてくださっています。生死の問題の解決は、阿弥陀さまにお任せするより他はないのであります。

昨年の三月に亡くなった兄は、事あるごとに「法義が一番大事」と言っていました。悩み苦しみの中でも、お念仏を申すこの一日一日が大事と味あわせていただいた事でありました。

(耶馬溪組教円寺住職 佐藤 哲英)

某月某日、某寺にて。



B男 御院家さん、こんにちは。

今から仏壇屋さんに寄って、お線香を買って帰ろうと思っっているんですが、どんなお線香が良いでしょうか。

住職 そうですね。花の香りとか香水の香りではなくて、少々値段が高くて、ちゃんと香水を使った線香を選ぶと良いと思いますよ。

B男 そうですか。先日、隣のおばちゃんが、屋久杉の香りの線香を買ったと言っていたから、うちもそれにしようかなあ。

代用品の杉線香

住職 ちよつ、ちよつと待つてください。香木というのは、伽羅や沈香や白檀などで、杉は香木ではないんです。

B男 そうなんですか。てつきり杉も香木かと思っていました。

住職 戦中戦後の、外国から香木が入らない時代に、代用品として杉線香が作られたらしいん

ですけど、最近になって誰かが勘違いして、普通の杉より高級感のある屋久杉の香りの線香を考え出したのでしようね。

B男 ああ、杉は戦時中の代用品でしたか。戦後六十年以上経っても代用品が使われているわけですね(笑)。

ペンペン草の境内地

②1 お線香は寝かせましょう



浄土真宗では線香は立てずに寝かせると聞いていますか。

住職 そうです。線香が広まる前は、練香といつて、さまざまな香材を調査して丸薬みたいにしていたようで、それを伸ばして固める技術ができて、現在のようない線香になったそうです。

B男 最初は丸薬みたいな形を

していたわけですね。

住職 丸薬型の線香にしても、お葬式の時などに用いる焼香用のお香にしても、立てることはできないでしょう。

B男 そうですね。

たからといって、立てる必要はないわけですよ。

B男 なるほど。そういうわければその通りですね。本来、立つべきものではなかったということですね。

住職 そういうことです。線香ができて、折るのは縁起が悪いなどつまらぬことを考えた人が立て始めたんだと思います。線香はどこまで燃えたか見せるためのものでもなければ、煙を出すためのものでもなく、よい香りを漂わせて仏徳を讃嘆するためのものであるという基本を忘れないようにしたいものです。

B男 はい。

住職 それともう一つ、折って寝かせるには安全上の理由もあります。立てた線香が倒れて、畳が焦げているお宅をよく見かけます。小さな火のようでも、ちよつと間違くと火事になりますから、気を付けましょう。

B男 そうですね。火事になっては元も子もないですからね。ありがとうございます。

住職 だから、固めて線香にし

掲示伝道

簡易法語掲示板

〔耶馬溪組 教円寺〕



掲示板は、仏教壮年会十五周年記念として、十年前にあげられたものです。

言葉は、毎月、ご院家さんが、心に感じた事や思いを、自分なりに書いていらつしやいます。車で通られる方にも読んでいただける様、時々は、二文字で大きく書く時もあるそうです。立ち止まって読んでらつしやる姿を見ると、嬉しくなります、との事でした。



日常の中の仏教(4)

東 光 爾 英



【お経】

ご門徒の方から時々聞かれる質問に「お経はなにをあげたらいいのでしょうか?」とか、「なかなかお経が覚えられませ

ん」などがあり、時には「亡き母にお経をあげてやりたいのですが」というものまであります。

初めの二つの質問は良いですが、三つめの質問は、母親を偲ぶ気持ちには理解できますが、お経は供養のための呪文のようなもので、亡き方があの世で迷わないように亡き方に対してあげるものだ、という考え方が質問者の心にあるように思います。こうした考えは、浄土真宗では誤った見方なのです。

そこで今回は、お経の内容は何で、何のためにあるのか、な

ぜ読経するのか、ということを考えてみましょう。

お経は古来より、八万四千の法門と言われるように、膨大な数が伝え残されています。しかし、その内容に共通することは、私たちが「仏」というめざめた者にどのようにして成ることができているか、という教えが説かれていくことなのです。

老いてゆくことによる苦しみ、病になることによる苦しみ、死を迎えることによる苦しみ、そうした苦を背負って生まれ、生きてゆかねばならない苦しみ(四苦)に代表されるのが、私たちの逃れられない苦です。それを、乗り越えてゆく生き方を悟ることが、「仏に成る」ということであると、お経には説かれています。人生の重要な道が示されているのがお経であり、それだから丁寧語の「お」を経の前につけて呼ぶようになったのです。

しかし、仏に成る道についておシヤカ様は、それを聞く人々に

にに応じて、いろいろな方法を説かれた為、多くの数のお経が伝えられてきました。

【真宗のお経は何?】

でもお経ならどれでもいいというわけではありません。私たち浄土真宗の宗祖、親鸞聖人はその著書『教行信証』教巻に

「だいむりょうじゆきん 真実の教を顕さば、大無量寿経これなり」と述べられています。聖人は、

長い間の仏道修行の後に、あらゆる人々が仏に成るお念仏の道を説かれた『大無量寿経』こそが、もっともよりどころとなる真実のお経である、と示されています。

すべての世界で変わらないものは何ひとつない、という無常の中に生きていながら、私という自分にとらわれつつける私。多くの人々のおかけによつて生かされているというご縁の中にありながら、自己中心の思いを捨てきれない私。それが私の心の姿であり、そうした心を捨てきれぬ我が身で、どうして仏に成ることができましようか、と聖人は人ごとではなく、ご自分のこととして受け止めてゆかれ

ました。

阿弥陀さまのご本願は、その私を仏に成らせる為のはたらきある誓いであります。なもあみだぶつ、一つによる救いを説かれたのが『大無量寿経』であり、だから聖人はこのお経を真実の教えと讃えられたのです。

でも毎日おつとめするお経は、『大無量寿経』は少し長いので、このお経を讀えて親鸞聖人が作られた「お正信偈」がよいでしょう。また「讚仏偈」や「重誓偈」も『大無量寿経』の一部ですからよいのです。また『阿弥陀経』や『観無量寿経』も、『大無量寿経』と同じく浄土三部経と讃えられ、浄土真宗の聖典と示されています。

【なぜ読経するのか?】

『大無量寿経』には、お念仏

を信じ称えてゆく私を、命つきたその時、お浄土に生まれさせ必ず仏にさせる、と示されています。亡き方々は、すでにお浄土に生まれ仏に成つておられ、迷うどころか私を阿弥陀さまとともに仏にさせるべく、はたらきつづけていることになりました。ですから、お経をあげること

は、そうした阿弥陀さまのはたらきを讀えるときともに、お念仏の教えをこの私が慶んでゆかためであると、味わうことができましょう。お経は覚えねばならぬものではありません。でも毎日の読経で、いつのまにか身についてゆく方も多いことです。最後に肝心なことは、お経に説かれたお念仏の救いを、ご聴聞させていただく、この一点に尽きますね。

聴聞、というように使われています。

聞こうと思つて聞き入ると聞こえてきてうなづける、となりましよう。お寺参りもご聴聞と言えましよう。



聴聞

ゆるされてき

く。信じてきく。説法を聴

聞、仏法を聴聞、信心の一

理を聴聞、耳をそば立てて



ビハーラ法話

『死の不安を超えて生きる』

大分ビハーラ役員 伊藤 公真



数年前よりビハーラ大分で取り組んでいる啓発活動として「こころで受ける医療」〜ビハーラ大分二人会〜があります。藤富豊先生と田畑正久先生の両医師による講演会で、県内各地の本願寺派寺院を巡りながら、医療と宗教の協働についてお話しださるものです。毎回、多くの聴衆が参集するこの会ですが、さる8月27日、第15回の二人会が当山で開催されました。平日の開催でしたが、門信徒以外の

方も多く参加され、この問題に対する関心の高さを感じました。藤富豊先生は外科医師として病院で体験された具体的な話を通して、医療が直面する問題について明らかにしてくださいました。病気はそれを治療することと共に、それとつきあうことが大事であるとも言われました。緩和ケアやホスピスという言葉を知っている人も、10年前には2割程度だったのが、ここ2、3年で様々な場所ですべてに上ることが多くなったそうです。かつては「どこで死にたいか」と問うと、「畳の上(自分の家で)で死にたい」という答えが多かったそうですが、昭和50年に病院で亡くなる方が死亡者数全体の半数を超えて以降、今では病院が「病気を治療する所」であると共に「人が亡くなる所」でもあるという状況が続いているのだそうです。こういった社会状況の変化によって、施設で実施できるビハーラ活動が期待されているのでしよう。

また、田畑正久先生のお話では、医療と仏教の接点についてお話をして下さいました。「明」と「浄土」は似た概念であるという話を皮切りに、死の不安を超えて生きることの大切さを力説されました。「おまかせします」と、お念仏して安心の内に生きて死ぬことのできる世界を、皆で育てることが大事であるとも言われました。そういう文化を共有することができるといえるのだと思います。

異常な暑さが通り過ぎ身体の不調を感じるようになりました。本堂がきれいになりました。春秋彼岸の中日に「初参式」をしましたので、そのことも添えて案内をだしたところ、新しくなったの「初参り」と受け取った方が多く、説明するのに互いに苦笑することでした。「初参り」に違いない。日頃からの教化のあり方を問われるようでした。

あとがき

生かされて

いつのまにやら九十年

私の心境です。と、九十歳を元気にむかえられた総代さんが、「この年になっても自我がめばえ、いつの間にか自分が中心になり、前に出ようとする自分がおりますが・・・目に見えないいろんなものに支えられて今日がありますの」と話されます。いろいろな話しの中に年を重ねる難しさと、年を重ねないとあじわえない喜びのあることを思わせてもらいます。報恩講の時期になり気の引きしまる思いがする。

おおいちゃん

